「突然、5歳のベテランが『ひとり暮らしがしたい』と言い出した」

主人公は横川豊隆さん。1949 年生まれの今年で 77 歳である。横川さんとその支援者である坂本彩さんのお二人を相談支援専門員等スキルアップ研修の講師として 7/21 に来ていただいた。



↳ 講演中の様子　　左:横川さん　右:坂本さん

横川さんには、重度の知的障害がある。発達年齢で言うと4歳半～5歳程度。なぜ、5歳のベテランなのか？それは最後にお伝えする。

横川さんは、63 歳のある日に「ひとり暮らしがしたい」と言い出す。その時、グループホームに住んでいたために、当時相談員であった坂本さんや周囲は驚く。グループホームに不満もなく、ホーム内での人間関係も良好で、その理由に坂本さんは思い当たることがなかった。

ここで、簡単に横川さんの歴史を振り返る。小学校には入学前に知的障害を理由に「就学猶予」の通知が届き、1年遅れで特殊学級（現在の特別支援学級）に入学。13 歳（1962 年）の時に近江学園に入所。近江学園と言えば、かの有名な糸賀一雄の障害児入所施設である。その後近江学園を出て、22歳～48 歳の 26 年間を農家に住み込みで就職。当時は、このような住み込みでの就職は多かったそうだ。

しかし、48 歳の時に農家も二代目に代変わりされ、廃業されたことで横川さんは新しく開所した入所施設に入所される（1997 年）。その時の担当職員だったのが坂本さんである。
施設での暮らしの様子から職員から「横川さんは入所施設を出て地域で生活できるのではな

いか？」という意見もあり、56 歳（2005 年）の時にグループホームでの生活が始まった。
グループホームでの生活は、一軒家で 30 代～60 代のメンバー4 人での暮らしであった。
横川さんが「ひとり暮らしがしたい」と言い出したのが、冒頭で伝えたように 63 歳。あと、2 年もすれば介護保険の年齢。特にグループホームでの生活に問題もなく、横川さんも不満はないと言う。同じ状況なら、僕ならどうしただろうかと考えた。間違いなく、様々な理由をつけて、本人の口から諦める言葉が出るように説得するだろう。理由はいくらでもつけられる。実際、横川さんは以下の理由があった。①金銭理ができない。②身だしなみが不十分。③家事ができない。④訪問販売などの金銭被害の可能性。知的障害がある人に支援者が理由をつけて説得することほど容易いものはない。決してそこに悪意があるのではない。本人にとってはその方が良いことなのだと支援者は考える。

横川さんがひとり暮らしをするには「できないこと」がたくさんある。「できないこと」を支援者が先回りして代わりにやることは制度を使えば可能である。だが、横川さんはヘルパーに指示が出しにくい。それはお膳立てされた形だけの一人暮らしにならないか？

坂本さんは、この時、「支援」ではなく、寄り添うことを選ばれた。できないことを練習して、できるようになってからひとり暮らしをするのではなく、今ある力でどうやってひとり暮らしをするか。そして横川さんの失敗経験を先取りしてしまわないという、2 つの目標を立てられた。

「本人の言葉を大切にしよう」支援の現場において異論を唱える者は誰もいない。しかし、実際にそれを実践するのは容易ではない。全て本人の言う通りにすることでも、本人の最善の利益を考えることでもない。

本人の心の声を訊くこと、その痛みを自分事として感じること、・・・感覚的にはわかるような、でも言語化することや、ましてや実践していくことはとても難しい。

今の社会においては、個々の能力を高めていくこと、自分できることを増やしていく努力をすることが称賛され、求められる。できないことができるようになって、自分の世界が広がっていく。それも間違いではない。それは、どうしても一方向に直線的に伸びていくイメージ。人と出会って人と関わりあいながら人は自分を見つけていく。楽しいことばかりではない。しんどいこと、面倒くさくて、嫌になるときだってある。1つのことが 1 つの結果に繋がるのではなく、様々なことが重なり合いながら予想もできない方向に膨らんでいく。
そう、それぞれひとり一人の QOL（“Quality of Life）”という視点が必要ではないか？
5 歳のベテランとは、同じように横川さんの講演を聞いた学生が「横川さんは『5 歳』のベテランですね」と言ったところから。ひとり暮らしを始めて十数年がたち、就労継続支援 B 型事業所に通っておられる。今度は、どんなことを横川さんが言い出すかに期待せずにおられない。

引用：「〈ヨコへの発達〉というまなざし」 著者：垂髪 あかり 坂本 彩 クリエイツかもがわ（2026 年）